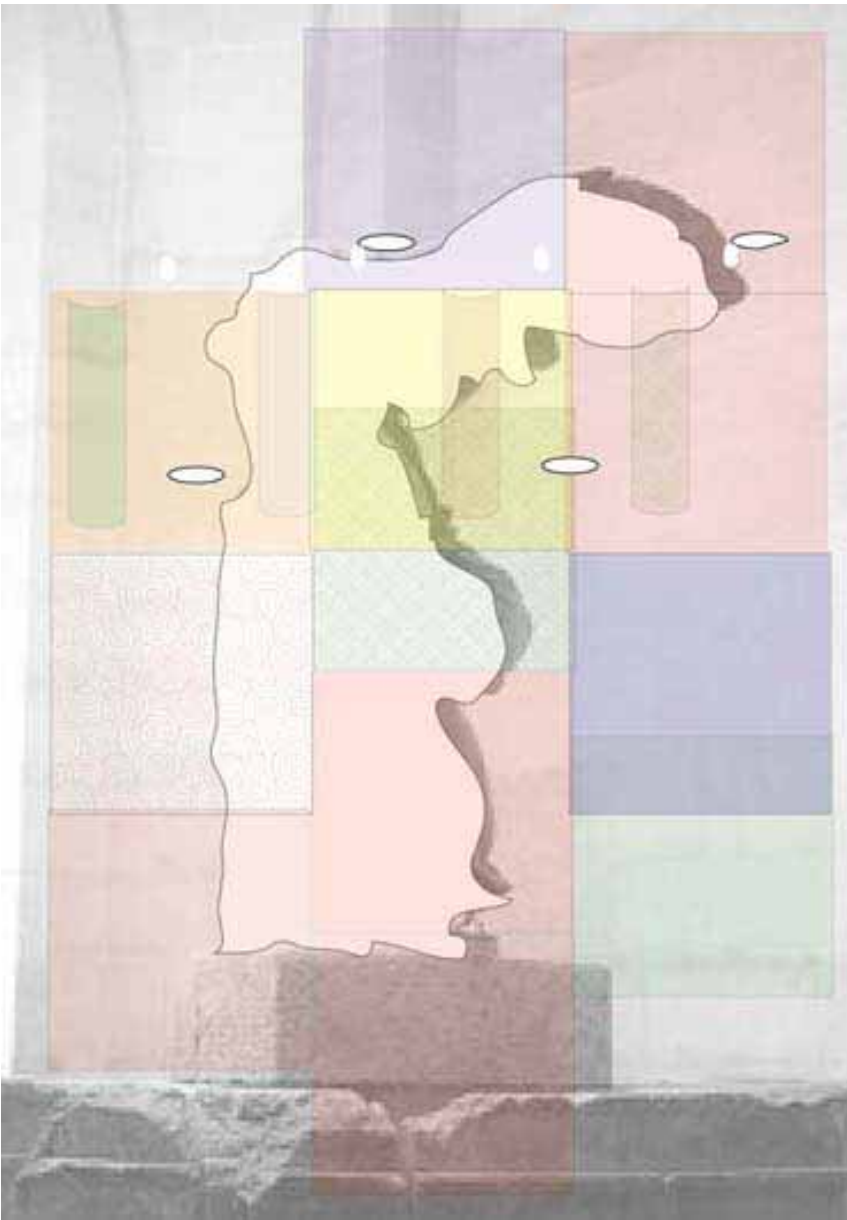


天使の羽根

どこかの町のどこかの家に、突然やってきたジープン姿のドジな天使
彼は名門天使の息子だったが、昼寝の間に大事な羽根を盗まれてしま
ったから大変

「羽根のない天使なんて、ただのマネキ猫と変わらないじゃない」と
か言われて、それでも優しい主婦は何とか天使に羽根をつけてやろう
とするのだが・・・

ドジな天使と、おせっかいな主婦の楽しいコント



「天使の羽根」

人物

天使 男 人間なら二十歳ぐらい
主婦 女 三十歳
まねき猫

屋根裏のような部屋の中央に小さな机が置いてある。舞台の背景に大きな窓があり、青空が見える。実は窓はこの部屋の天井にある天窓であり、部屋の中から天窓に向かってはしごが掛けてある。中央の机の陰に若い男（実は天使）が疲れたような様子でうずくまっている主婦が招き猫を連れて登場、招き猫を舞台の中央に立たせる。

主婦 鯛焼き買って、招き猫あたるやて変な話やわ。こんな大きなもの部屋の中に置けへんやないの。なんぼ看板が招き猫ゆたかて、福引の景品まで招き猫にせんでもええのに。でもこの鯛焼きはまだあつたかいわ。

主婦が手にもった袋をあけて鯛焼きを取り出そうとすると、「奥さん」という声が聞こえる。主婦があわてて「はい」と返事をして鯛焼きを袋ごと舞台中央の机に置いて出ていく。すると机の陰にいた天使が主婦がいなくなったのを確かめてから、机の上の袋を開けて鯛焼きを一つ取り出し、しばらく眺めた後、むしゃむしゃ食べる。食べ終わったところに主婦の声が聞こえ、戻ってくる様子なので、あわてて袋を招き猫に持たせて、また机の陰に匿れる。

主婦 （声）何よ、あの招き猫の配達料がいるんですって。おまけに五円やて御念がいつてるわ。

主婦が舞台に戻り、机の上に置いたはずの鯛焼きの袋を招き猫が持っているのに気がつき、しばらく怖

い顔で招き猫を睨んだ後頭をひっぱたいて鯛焼きの袋を取り戻す。

そして、もう一度袋を開こうとすると、また「奥さーん」という声が聞こえ、あわてて返事をしてから、鯛焼きの袋を机の上に置きかけるが、思いなおして袋を持って出て行く。天使が主婦のいないのを確かめて姿を表し、机の上の袋を捜す。すると、今度はすぐに主婦の声がする。

主婦（声）何よ、お隣じゃないの。お隣も招き猫があつたのかしら。

主婦が舞台上に登場して天使と顔を見合わせる。

主婦 あら、あなたはどなた。どこから来たの。

招き猫（「どろぼう」と大きく書かれたプラカードを掲げる）

天使（天窓の方を指さす）

主婦 わかったわ。あなたはどろぼうで、あの天窓からやってきた。でもこの部屋には何にもないでしょう。そうやわ。ちょうどいいわ。この招き猫持ってかえる。

招き猫（主婦のほうにイエローカードを出す）

天使（怒ったように）僕はどろぼうじゃありません。それにそんな変な招き猫なんていりませんよ。

招き猫（今度は天使にイエローカードを出す）

主婦 じゃああなたはどなた。あんな高いところから入ってくるなんて泥棒じゃないとしたら、もしかしたらあなたは宇宙人。この間見たわ宇宙人の映画。題はたしか「未知との遭遇」。でも違うわ。映画に出てきた宇宙人はそんな薄汚い恰好ではなかったわ。

天使（怒ったように）もちろん僕はあんな薄汚い宇宙人なんかではありません。信じていただけないかもしれないけど、僕は天使のはしくれなんです。

主婦 まあ、素敵。私天使に会うのが夢だったの。（天使を調べるように見ながら）でも嘘やわ。だって羽根がないじゃない。羽根のない天使なんて聞いたことないわ。

天使 羽根がなくても天使なんです。

主婦 でも西洋の有名な絵や彫刻にでてくる天使にはみんな羽根があるじゃないの。ほら有名なダビンチやボッテイチエルリにでてくる天使はきれいな羽根があるし、

Rの奈良駅には顔がないけど、大きな羽根をつけた女神が居てはるわ。

昨日テレビを見ていたら、女の子の歌手が「天使の誘惑」という変な歌を歌ってたけど、背中にはちゃんと小さな羽根をつけてたわ。

天使 もちろん、僕にも羽根はあつたんですけどね。昨日までは。

主婦 じゃあ、今日はどうしたの。

天使 盗られたんです。

主婦 誰に。

天使 人間に。

主婦 (天使の顔を見て) 本当？。

天使 本当なんです。今日は僕たちは天気がいいので、みんな飛んでいたんですけどね。僕はそのうちに少し眠たくなつたんで、この町の公園において木陰で昼寝をしていたんです。で、しばらくして起きたら背中が少し寒いので変だと思つたら羽根がない。

主婦 ドジね。

天使 そうなんです。僕の家はローマ時代から代々続いているレッキとした名門天使の家柄ですからね。羽根を盗られたなんて知れたら僕は勘当されてしまうかもしれない。

主婦 それにあなた、羽根がなかったら空を飛べないんじゃない。飛べない天使なんて只の招き猫と変わらないわ。

招き猫 (またイエローカードを主婦に出す)

天使 どこかこのへんに天使の羽根を売っている店はないでしょうか

主婦 そうね。すこし前までは「天使のお店」という子供向けの洋服店があつたけどつぶれちゃったし、駅前に「天使の館」という店があるけどあれはアルサロだから客を飛べないようにするのが商売でしょ。そうやわ公園の近くにコンビニがあるわ。行ってみた。

天使 ええ、天使の羽根はありませんかって店の女の子に言つたら、「裸の天使」というAVビデオを持ってきてくれました。

主婦 まああのコンビニ、そんなものまで売っているの。

天使 結構面白かったですけどね。

主婦 そうね。困つたわね。空を飛べないと帰れないのね。何かないかしら。

主婦が後ろのダンスを探しに行く。

主婦　こんなのどうかしら。(とダンスから取り出し出てきたのは、ドラエモンのタケコプター)夜店で売ってたのよ。

天使　(タケコプターを頭にのせてみて)飛ばないですね。偽物じゃないですか。(といいながら、招き猫の頭につける)

主婦　あら、こんなものもあるわ。(今度は子供用の小さいマントを持ってくる)子供が学芸会でスーパーマンをやった時のものなの。

天使　(マントをつけて少し飛んでみるが、何度やってもつんのめってしまふ)ダメですよ、やっぱりアメリカ製は合わないですね。(マントを招き猫につける)

主婦　あら、これ。なつかしいわ。(と、ほうきをもってくる)

天使　(ほうきを手にもって)何ですか、これは

主婦　これはね、私が宝塚歌劇で魔女をやったときのほうきなの。これに乗ってちゃんと飛んだのよ。舞台の中でだけ。

天使　(招き猫にほうきをもたせながら)魔女は天使の商売仇なんです。

主婦　あ、やっと思つかつたわ。(と今度は天使の羽根のようなものを持ってくる)

天使　うわあ、これ羽根じゃないですか。えーすごい。でも少し小さいみたいです。

主婦　子供が幼稚園のお遊戯で使ったものだから小さいかもしれないけど、でも羽根は羽根よ。(天使の背中に羽根をガムテープでつける)。

天使　(すこし飛んでみたりスキップしたりしてみる)。

主婦　どう飛べそう。

天使　ええ、なんだかまだしっくりしないけど、これなら飛べるかもしれない。

主婦　ちゃんとやってみて。

天使　え？

主婦　だから、子供が踊った時のようにやってみるのよ。

天使　(少しラジオ体操のようなことをやってみる)。

主婦　それじゃ体操だわ。こつよ。

主婦がアイドル歌手のようなフリで踊る。天使が主婦と並んで踊る。
すると後ろのまねき猫もいっしょに並んで踊る。

主婦 (まねき猫をにらんで) お前はやらなくていいの。

まねき猫が頭をかいて後ろにさがる。天使が一人で踊るのを主婦が見守る。

主婦 うん、いいじゃない。飛べそうよ。

天使 ええ、何だか僕も飛べそうな気がしてきました。うれしいな。そうだ、何かお礼をしないとイケませんね。僕たちは親切にしてもらった時は贈り物をするのがしきたりなんです。天使の贈り物。時々百貨店でそんな名前のバーゲンセールをやってるけど、僕たちのは掛け値なしの本物です。

主婦 (うれしそうに) まあうれしい。感激やわ。そうだよ。もうすぐ私の誕生日なのよ。何にしようかしら。高級バッグ、それとも毛皮のお洋服。そうやわ。ダイヤの指輪がいいわ。天使のダイヤ。感激やわ。

天使 ええ、帰ったらさっそく大天使ガブリエル様にお願いでして贈り物をしていただきます。そのためにもこの羽根で飛べるようになって早く帰らないと。

主婦が天使と奥の梯子を交互に見る。

主婦 じゃあ、飛んで。

天使 え、

主婦 あそこから飛んでみてよ。

天使が梯子と主婦を交互に見る。

天使 だから少し練習しないと。すぐには。

主婦 もういいんじゃない。あなたさっき飛べるような気がするっていつたでしょ。だから気がするんじゃないよ。飛べることを確かめるのよ。ダイヤの指輪のためよ。

天使 本格的に飛ぶにはやはりそれなりの手続きが。生命保険に入るとか。遺言を書いておくとか。

主婦 いいわよ、そんなもの。あなた名門家柄の天使でしょう。ダイヤの指輪でしょ。

天使 関係ないけど。そうだ。今日はこれからデートだった。もう行かなくちゃ。(と行きかける)

主婦 (天使の前に立ふさがって) 駄目。飛んでからよ。

天使 うーん。別に飛ばなくても、歩いて帰ってもいいわけだし。ちゃんと足があるんだから。

主婦 そんなことしたら、私の誕生日までに帰れないじゃないの

突然、天使が舞台袖に走ってにげる。

主婦が招き猫に合図する。まねき猫が天使をひきづるようにして舞台に戻ってくる。

天使 (梯子の前に行って上りかけるが) あ、そうだ。阪神の試合みなくちゃ。

招き猫が天使の腕を掴んで離さない。

天使 (少しやけぎみに) 分かりました、飛べばいいんですよ。飛べば。こう見えても僕のおじいさんのおじいさんのおじいさんなんか、あの栄光の神の都コンスタンチノープルを異教徒から守るための戦いに参加した勇者ですからね。ぼくはその血筋を受け継いでいるんですよ。

主婦 まあ天使も戦争をしなくちゃいけないの

舞台が暗くなって声だけが聞こえてくる。天使は梯子を上っている様子。

天使 そうですよ。あれは五百年も前の出来事だけど、あの戦争が天使の最後の戦争だって僕のお父さんも言っていました。あれから人間達は天使には考えもつかないような恐ろしい武器を次々に作って大きな戦争を始めましたからね。天使は遠い昔の人間達の、あこがれと悲しい祈りの中から生まれたんですよ。だから僕たちは人間の幸せのために戦ったのに、人間達は自分で不幸を作りだしている。

僕もこんなところで飛ばなくてはいけないうちで、人間のわがままのために天使まで不幸になっていく。天国のお父さん、この不幸な僕を守って下さい。

主婦 何をこちゃこちゃいっているの。あなた天使でしょ。ちゃんと羽根もつけたし飛べるわよ。さあ、胸をはっ

て勇気を出して、飛ぶのよ。天まで飛ぶのよ。

少し間があつて、その後、感激したような主婦の絶叫が聞こえる。

主婦 見て、見て、天使が私の羽根をつけて、高い高い空の彼方へ飛んでいくわ。

(突然天使の「アー」という叫びが聞こえ、「ドサッ」という音がする。そのあと舞台が明るくなる。天使が床の上につつぶせになってのびている。主婦とまねき猫が寄ってきて天使を見下ろしながら顔を見合わせる)

主婦 あらこの羽根、この間、子供が学芸会の時「飛べないアヒルの子」で使っていた羽根だわ。

(幕)